

小説「ちぎられた縄」における火野葦平の 「日本復帰」認識について

張，殷瑜

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

90

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2023-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026719>

小説「ちぎられた縄」における火野葦平の「日本復帰」認識について

人文科学研究科 日本文学専攻

博士後期課程二年 張 殷瑜

1. はじめに

北九州若松出身の火野葦平は、戦前・戦時下・戦後を通して、沖縄へ三度行ったことがある¹。これについて、火野は「戦前の平和で美しかった時代、戦争中、インパール戦場から命からがら逃げかえる途中、那覇に寄って見た。騒然と戦雲がうづまいていた時代、そしてまったくアメリカの支配下にある現在——三つの沖縄の姿は私を考えこませた²」と述べている。火野にとつての沖縄の意味について、坂口博は「火野葦平と沖縄」で「戦中は「兵隊作家」として名実ともに国民的作家となり、戦後は一転、戦争協力作家として非難されることが多かった火野葦平だが、その戦後の足跡をたどるならば、一貫した「平和」への希求が見られる。そして、その源流といえるのは、やはり沖縄であろう³」と指摘している。いうまでもなく、沖縄は戦後の火野に関する研究において無視できない土地である。

一九四五年、沖縄戦の最中に発表された「島」(『文芸』、四月)を始めとして、一九四八年からは、自身の沖縄体験を素材にした作品を発表した。それらの作品の中で、異国情緒に満ちた沖縄の伝統や文化を紹介したり、戦時下の沖縄の惨状を描いたりすると同時に、戦後の沖縄の様々な問題にも触れていた。一九五七年、「沖縄はフタカチャの御代」で、火野は「私も早くから琉球にはいろ

いろな意味で関心を持っていたので、琉球に関する作品はいくつも書き、昨年はプライス勧告のあまりの理不尽さに憤りをおさえることができず、戯曲「ちぎられた縄」を書いて上演した。しかし、泣きごとめいたことを告白するが、なんと言論というものが無力で、怪物的なアメリカの開拓精神(フロンティア・スピリット)に歯が立たないかということとは悲しいばかりである。」と書いている。「ちぎられた縄」は火野がアメリカ占領下におかれた沖縄人が抱える問題を正面から描いたものの代表作だといえよう。

一九五六年九月、小説「ちぎられた縄」は『オール小説』に発表された。同年一〇月一三日―二三日、劇団文化座十五周年記念公演のため創作された戯曲「ちぎられた縄⁵」は、一ツ橋講堂で上演され、十二月『テアトロ』に発表された。戯曲と小説では内容が違うので、本論では、小説「ちぎられた縄」を対象に考察する。

小説「ちぎられた縄」は、一九五五年の伊江島の武力による土地接収を題材とし、戦後の沖縄の、軍用地問題、米兵による性犯罪問題および「日本復帰」問題等を物語るものである。

2. 先行研究の検討

小説「ちぎられた縄」に関する先行研究はまだ少ない。

池田浩士『火野葦平論』では、作品の内容について踏み込んだ考察を行って
おらず、主に小説の内容を引用によって示し、粗筋を紹介している。その上で、
「火野葦平が「ちぎられた縄」を書いた動機や意図の真摯さを疑う余地など、い
ささかもない」にも拘らず、火野の少なからぬ作品の根本的な問題の一つとし
て、「アメリカに対する批判と怒りが作者の沖縄に対する思いを高めるぶんだけ、
戦中の、そして戦後の、日本の沖縄に対する無惨な加害は、沖縄への一方的な
愛と共感の蔭につつまかくされてしまうのだ」と指摘した。

菅野聡美は「楽園幻想の起源を求めて——①火野葦平が愛した琉球」の中で、
火野の持つ沖縄へのイメージの内容を紹介すると同時に、「米軍占領下を舞台に
した「ちぎられた縄」は、米軍の横暴への怒りと告発にみちあふれ、「沖縄を日
本に返せ」という明確な政治的メッセージを鮮明にうちだしている。火野には
珍しい政治意識の発露である」と評価したものの、「日本復帰」問題に対する詳
しい分析はなされていない。

仁衡琢磨は「本土」人が描いた沖縄と基地問題——火野葦平と当事者性」で、
小説「ちぎられた縄」と火野を高く評価した。「ちぎられた縄」については、火
野が当事者性を持つてこの作品を書いたという考えを示し、作品には「差別構
造と「本土」人の当事者性欠如などが明確に示されている」と述べ、また、今
日まで存在している「差別構造の問題を昭和三十一年の段階で世に明らかに示し
た「ちぎられた縄」の意義は決して小さくない」と主張し、作品の価値がリア
ルタイム性にあり、その尊さは「昭和三十一年に既に相当の当事者性をもって沖
縄と基地問題を描いた」というところにあると指摘した。火野については、「現
代の沖縄出身作家ほどの深度・当事者性がないとしても、この時期にこの作品
を世に出した火野葦平は作家として素晴らしい仕事をした」と主張し、「火野に
は時代的制約、「本土」人の限界はあったと思うが、それでもやはり火野の沖縄
描写は素晴らしいと感じる」と評価した。しかし、「日本復帰」問題については

触れていなかった。

Stefano Romagnoli は「From Secluded Paradise to Hell on Earth. Hino Ashihei's
Imaginative Geography of Okinawa」¹⁰で、火野の沖縄題材作品を対象に、作品の傾
向を中心に分析を行った。作品によって、沖縄イメージが違うにも拘らず、沖
縄がいつも「弱者」として描かれ、従属的な立場に置かれており、作品におけ
る沖縄が性別化され、沖縄人女性が沖縄の運命の象徴として、小説「ちぎられ
た縄」のツルと朝子の場合もそうだと指摘している。また、小説「ちぎられた縄」
におけるジャーナリスティックな書き方によって、火野のアメリカへの痛烈な
批判を裏付けていると評価している。しかし、「日本復帰」という問題にはやは
り論及されなかった。

いうまでもなく、「日本復帰」とは、戦後沖縄研究において無視できない問題
である。また、本土人の沖縄への認識を明らかにするためには、この沖縄の「日
本復帰」に対する彼らの見方を究明する必要があるだろう。本土人としての火
野は「地獄島沖縄」で「沖縄問題はいうまでもなく、日本と日本人全体の問題
である。私たちはもっと沖縄を身近に見つめなければならない」という態度を
示している。また、火野は随筆「ちぎられた沖縄」でも『国旗』の章で、書い
たように、沖縄は日本の一部であるのに、引きちぎられて、地獄と化している」¹³
と強調している。では、「日本復帰」に言及している小説「ちぎられた縄」から、
火野のどのような認識を読み取れるのか。また、この認識にはどのような特徴
と限界があるのか。

本稿では、沖縄の「日本復帰」問題に焦点を絞り、小説「ちぎられた縄」の
創作背景を検討し、作中における沖縄と沖縄人のイメージを考察し、沖縄人の
アメリカに対する態度、沖縄の所属に関する認識、日本本土と本土人への考え、
「日本復帰」への見方などを分析することによって、火野葦平が「ちぎられた縄」
でどのような「日本復帰」認識を表したのか、また、そのような認識にはどの

ような特徴があるのかを知る一助としたい。

3. 戦後の沖縄（一九四五年～一九五六年）

すでに述べたように、小説「ちぎられた縄」は一九五六年九月に発表された。同年六月に米下院軍事委員会から「プライス勧告」が発表されている。では、戦後の一九四五年から一九五六年までの間に、沖縄で何が起きたのかを詳らかに述べよう。

一九四五年四月一日、米軍は沖縄に上陸した。六月下旬まで、日本側は甚大な損害を受けた。¹⁴ 激しい地上戦の末、六月二三日、沖縄はアメリカの軍事占領下におかれることとなった。¹⁵ そして一九四五年九月二日、日本政府は降伏文書に調印した。九月七日、沖縄では、南西諸島の全日本軍を代表して、先島師団長納見敏郎中将らが、降伏文書に署名して沖縄戦は公式に終了した。

日本は米軍を主体とする連合国軍の占領下におかれたのである。一九四六年一月三日、連合国最高司令官総司令部（以下、GHQ）の主導のもとで、新しい日本国憲法が公布され、翌年五月三日施行された。その中に、主権在民、象徴天皇制、戦争放棄などが規定された。沖縄については、一九四七年、GHQ最高司令官マッカーサーが日本の非武装化（戦争放棄）と沖縄の分離軍事支配が一体不可分のものであると明確に述べた。¹⁶ 同年九月、いわゆる沖縄に関する天皇メッセージがGHQに伝えられた。それには「アメリカが、日本に主権を残し租借する形式で、二五年ないし五〇年、あるいはそれ以上、沖縄を軍事支配することは、アメリカの利益になるのみならず日本の利益にもなる」という内容が含まれていた。その後、「象徴天皇制・非武装国家日本・沖縄の米軍支配を三位一体・不可分の関係としたGHQの占領政策は、中華人民共和国の成立が視野に入ってくる段階で、修正を余儀なくされた」。¹⁸ 一九五二年四月二八日、対日平和条約の発効とともに、日本はアメリカ占領の状態を終え、独立国家と

しての主権を回復した。しかし、日本本土と違って、一八七九年、県として日本の版図に入った沖縄は、対日平和条約の第三条¹⁹によって、引き続き米軍の占領下におかれることとなった。また、対日平和条約が締結された同じ日の午後、日米安全保障条約も締結された。それに伴い、目下の同盟国で主権国家である日本の基地の不安定性を克服するために、米軍の沖縄への排他的支配が強化された。「沖縄は、もはや単に非武装国家日本の安全を保障する軍事拠点ではなく、アメリカの世界戦略における「太平洋の要石」となった」。²⁰ 事実、一九五五年一月に勃発したベトナム戦争²¹では、沖縄が米軍の重要な後方支援基地となった。

対日平和条約と日米安全保障条約の締結によって、アメリカの沖縄における軍事基地建設はますます本格化していった。一九五二年一月、米軍は軍用地賃貸契約のための布令九一号「契約権」を公布した。この布令は、土地使用料の安さのために、軍用地主に受け入れられなかった。²² この事態に対して、琉球列島米国民政府（以下、米民政府）は一九五三年二月、布告二六号を公布し、「長期にわたる使用の事実によって『黙契』（^{マヤ}暗黙の契約）が成立している」とみなすことにした。²⁴ それにとどまらず、米軍は基地を拡大しもっと多くの土地を接収するために、一九五三年四月三日、布令一〇九号「土地収用令」を公布し、即日施行した。その後、真和志村、安謝・銘刈（一九五三年四月）、小禄村具志（一九五三年十二月）、伊江村真謝（一九五五年三月）、宜野湾村伊佐浜（一九五五年七月）などで、「銃剣とブルドーザー」による土地接収を行った。²⁵ これらの圧迫に対して、地元農民は抵抗したが、一九五四年三月、米民政府は、軍用地料の一括払いという方針を発表した。それに対して、沖縄人から「土地を守る四原則」²⁷ が提出された。それと同時に、四者協²⁸ が結成され、対米交渉が行われることとなった。

一九五五年六月の四者協渡米代表団の要請に基き、同年一〇月、米下院軍事委員会はプライス調査団を沖縄に派遣した。調査の結果として、一九五六年六

月、沖縄の米軍用地問題に関する報告書、即ち「プライス勧告」が米国議会に提出された。勧告には、沖縄基地が、「一、制約なき核基地として、二、アジア各地の地域的紛争に対処する米戦略の拠点として、三、日本やフィリピンの親米政権が倒れた場合の拠り所としてきわめて重要であることを強調し、米軍用地政策を含むそれまでの米軍支配のあり方を基本的に正しいとしていた」とあり、「プライス勧告」が沖縄の軍事基地問題を緩和させなかったことは疑えない。逆に、米軍の軍事基地建設を合理化するものであった。

こうして、戦後、米軍の軍事基地から様々な問題が生じるに従って、沖縄の人々は現状を変えるために、本土に視線を向けて、「日本復帰」に関わる組織を立ち上げ、多くの運動を行った。では、一九四五年から一九五六年にかけて、沖縄の「日本復帰」はどのような動きをしたのであろうか。

戦後、沖縄の帰属について、「当面予想されていた選択肢は、ほとんど議論の対象にもならなかった中国帰属をのぞけば、日本復帰、アメリカによる信託統治、独立の三つだった。」³⁰一九五〇年、対日講和が日程に上るようになり、復帰論が高まるようになった。一九五一年四月、沖縄社大党と人民党が中心となり、「日本復帰促進期成会」が結成された。続いて、社大党の「新進会」が主体となって結成した「日本復帰促進青年同志会」が生まれ、同年五月には、両組織は全島の署名運動を展開し、二〇万人近く、選挙有権者数のおよそ七二%に当たる署名を集めた。一般には、この署名活動は「復帰運動」の始動とみなされている。³¹その後、一九五三年一月一〇日、沖縄青年連合会や沖縄婦人連合会など五団体の協力で「沖縄諸島祖国復帰期成会」が形成され、³²同月一三日には、「第一回祖国復帰総決起大会」の開催によって、民衆の意識が呼び起こされ、世論の注目を集めることになった。³³「プライス勧告」公表後の一九五六年六月二〇日、全沖縄六四市町村のうち五六市町村で市町村民大会が開かれた、同月二五日、第二回住民大会が那覇とコザ（現沖縄市）で開かれた。³⁴

以上をまとめれば、戦後、日本の一県である沖縄は日本本土と同様に、アメリカの占領下におかれたが、一九五二年、対日平和条約の発効によって、本土のように占領された状態を終えることが出来なくなった。逆に、世界情勢と日米関係の変化とともに、その戦略的地位がより強調され、占領状態が続くことになる。対日平和条約と日米安全保障条約の締結は、アメリカが沖縄に軍政を敷き、排他的支配を行うことに合理的な根拠を提供したといえる。米軍の軍事基地の拡大にともない、軍事基地問題が次第に深刻化していったのだ。一九五〇年から、沖縄では、「日本復帰」に関する組織が発足し、様々な運動も行われた。米軍の沖縄への支配を強化させる「プライス勧告」が発表された後も、沖縄では、復帰を目指す運動が続けられた。

では、このような背景のもとに創作され、発表された小説「ちぎられた縄」には、いかに戦後の沖縄と沖縄人を描いたのであるか。

4. 占領下におかれた沖縄と沖縄人

火野の沖縄の「日本復帰」に対する考えを明らかにする前に、作中に描かれた沖縄と沖縄人のイメージを検討しておきたい。

4. 1 アメリカの植民地としての沖縄

作中に「そして、その年が暮れ、あの、一九五五年三月十一日が来た」と書かれているように、火野は一九五五年前後の沖縄を舞台にして、小説を創作した。一九五五年前後の沖縄のイメージを表す言葉として、「植民地」がキーワードの一つとして作中に何度も現れる。

那覇の街は、すでに、一九四四年十月十日の大空襲によって、灰燼に帰していた。壺屋町の一角を残したきりで、地上から消滅したのである。首

里は守礼門をはじめとして、古めかしく典雅な王城があったが、砲弾と爆弾とによって、跡かたもなく破壊された。古琉球の情緒は追放され、アメリカ式植民地の街が、全然新しい規模によって再建された。(後略)

このように、戦争によって消滅させられた街が、戦後、アメリカの占領下で再建され、アメリカの「植民地」となった。しかし、この新しい街は沖縄人にとって何を意味するのか。アメリカはこの戦後の那覇に何をもたらしたのか。これらを明らかにするためには、この再建された広い植民地空間における「ガーブー川」³⁵の存在を見過してはならない。火野が「沖縄はフタカチャの御代」に「この「ガーブー川」が現在の沖縄の象徴のような気がした」³⁶と書いたように、沖縄の現状は、この「ガーブー川」という植民地空間に言説化されたといえる。

市場通りの中心を奇妙な川が流れている。ガーブー川と呼ばれているけれども、だれもその名の起源を知らない。一度地上から消滅し去った那覇は、全然新市街になって出現したので、古い市民でさえ道を迷うくらいだが、この「ガーブー川」にいたっては妖怪の川といってもよい。二間足らずの狭くきたない泥溝川で、颱風期には氾濫し、蚊の発生地なので、市民を悩ましているが、地図の上では陸地になっている。しかし、市内でもっとも繁栄しているのはこのガーブー河畔だ。物資は割合に豊富で、朝から物売りの混雑はひどい。ただ、あまり物が売れている様子がなく、農村から出て来るミジョーキ売りや、乞食の子供たちも、夕暮れになると情なそうな顔をしている。この市場のなかには、ときどき、古い沖縄の風俗が見られる。(中略)しかし、それにはもはや情緒を感じるよりも、すたれ行く残骸と貧窮との影の方が濃い、琉球絛や芭蕉布を売っている反物屋もあるが、買い手はまれだった。

戦後、沖縄人の生活はアメリカによる都市再建によって、改善されなかった。具体的にいえば、排水路であるべき川は汚く、相変わらず氾濫している。「物資が割合に豊富で」あるのに、乞食の子どもがいる。また、「農村から出て来るミジョーキ売りや、乞食の子供たちも、夕暮れになると情なそうな顔をしている」という表現から、この「繁栄している」「新市街」に来る人は少ないと推測できる。一番繁栄している河畔でさえこのような状況であるなら、那覇および沖縄全体の状況も想像に難くない。戦後の沖縄人の生活状況の改善は順調とはいえなかった。

この川には、「古い沖縄の風俗が見られる」にも拘らず、すでに琉球情緒が感じられなくなっている。桜坂の小料理屋「珊瑚」の周辺の変化もそれを裏付けている。

(前略) よろず植民地文化になった那覇からは、古典劇をやる劇場は経営困難で消え、映画館は簇生した。桜坂にも数軒の映画劇場がならんでいたが、「南映座」の裏手には、飲み屋小路があつて、「珊瑚」は垢抜けしたおでんやだった。

沖縄の伝統文化を具象化する古典劇場は、すでに植民地文化の影響で映画館に取って替わられた。前述のように、植民地文化の進出は沖縄人によりよい生活をもたらしたのではない。もちろん、戦後十年という短い期間に、新しい精神的な支えがそこに生じるのも不可能である。逆に、このような過程において、沖縄人は昔から馴染んでいて自分の精神を支えた伝統的な文化を失ってしまった。沖縄は失われた伝統文化と抵抗できない新しい植民地文化の間をさまよっているといえよう。戦後の那覇は「新市街」として再建されたが、「古い市民でさえ道を迷う」というのは、実際に〈道〉に迷うというより、沖縄人がアメリカ

力の植民地支配におかれて、生きて行く物質と精神生活の〈道〉に迷っているというこのメタファーとして捉えることが可能であろう。

このような沖縄文化への加害以外に、沖縄人個人への加害も続いている。また、この個人への加害は「ガープ川」においてさらに直接的だといえよう。作中、新垣清二の姉ツルと妹朝子が、釈放された父を迎えに来て、那覇警察所からホテルへ行く途中、「ガープ川」の岸の道を通っているとき、米軍に襲いかかられ、さらわれる。最後に米軍の将校に救われてはいるが、米軍の沖縄人への日常的な暴行の一端が窺える場面である。

小説では、これが計画的ではなく、偶発的に発生したものだと思われるが、偶発的なものである点にこそ、この米軍の沖縄女性に対する犯罪行為の多発性が顕在化されている。

当時の沖縄という植民地空間全体における被害はどうであろうか。よく知られている「由美子ちゃん事件」³⁷以外に、沖縄の米軍犯罪行為について、以下のように作品に書かれている。

（前略）こないだ新聞社で統計を作りよったが、（中略）この五年間で、殺人三、未遂三、強姦致死一、強姦二百九、未遂十七……強姦が合わせて二百二十六だぞ。これは届け出ただけさ、恥かしくて届けん方が多いくらいかも知れん。それから、放火十一、住宅侵入七十八、器物毀棄三百九十五、外人からの交通事故による被害、死亡百二十四、重傷百八十五、軽傷三百九十三……（後略）³⁸

つまり、性犯罪以外にも、米軍による犯罪事件は絶えず発生していた。小説の最後で、新垣ツルは、米兵に強姦され、妊娠し、自殺する。新垣朝子は再び米兵に襲われ、凌辱こそ免れたが、逃げる途中に崖から落ちて、死亡する。こ

のように、米軍の加害によって、死亡した沖縄人は戦後増え続けていた。

また、沖縄に設置された機関も注目値する。自分の土地を守るために、米軍の将校に殴りつけられた新垣清二の父三吉は、被害者であるにも拘らず、那覇警察署に留置され、暴行を受ける。また、那覇軍事裁判所に出廷する直前にも、三吉は米兵に殴られている。いうまでもなく、この那覇警察署は実際に被害者の市民を保護するという役割を果たしていなかった。那覇警察署だけではなく、那覇軍事裁判所もそうである。三吉は釈放されたが、加害者の米軍将校は結果的にいかなる処罰も受けなかったのである。³⁹

作中に「犯罪などなかった平和の島なのに、終戦後は兇悪な犯罪島と化したのである」と書かれているように、沖縄人にとっては、戦後の沖縄は、新しい都市というより、様々な社会問題を孕むアメリカの植民地に過ぎないのである。

では、作中でこのような支配におかれた沖縄人は現状を変えるためにどのような考えを持っているのか。

4. 2 日本に復帰したい沖縄人

作品では、米軍の基地問題として、伊江島の事例が大きく取り上げられている。

戦時下、大きな被害を蒙った伊江島の人々は、一九四七年三月まで自分たちの島に戻れなかった。島民たちは、戦争と米軍の軍事建設によって壊された島の土地を開墾し、家を建てたが、米軍の土地接収によって、再び土地を失い、家もほとんど米軍に燃やされた。土地と家を失った伊江島の人々の生活は苦難を極めるものだった。

また、那覇警察署に抑留された三吉は「日々、肥え太った」とある。なぜなら、「伊江島では、ただ、生きているという程度の食糧しかなかったのに、警察ではともかく三度三度食事をあてがわれたし、それが島ではめったに食べたことも

なかった米の飯だから」であった。普通の生活より、留置場の方が快適だという、皮肉極まる状況であった。当時の沖縄人の生活は正常な社会生活とはいえない難かった。それに対して、米の軍人は取り上げた土地で「ゆつたりと庭をとって平屋の家屋を建て、十萬坪以上もあるゴルフ場まで作って、贅沢な生活をしている」とされている。

そして、貧窮した物質生活に伴うのは、不自由な言論環境と政治活動であった。火野は「沖縄はフタカチャの御代」で「いうまでもなく、アメリカ軍が沖縄を占領しているためで、沖縄には言論の自由がない」と述べている。作中「琉球タイムス」文化部記者である知念吉男は、アメリカ及び米軍の土地の取り上げ問題を批判したため、米軍に捕えられた。これについて、「偶然ではなく、最近是不穏な分子を警戒するため、監視網が張られていた」と説明される。実際には、アメリカを批判することのみならず、「アメリカは反米家、日本復帰論者に眼を光らしとる。なによりも共産党を眼の敵にしとる」のである。先に述べたように、アメリカは中国に対抗するために、沖縄に対する植民地支配を強化した。人々から言論の自由を剥奪するのも、その一つだといえる。知念は「記者」という影響力のあるマスメディアの人間だからこそ、余計に統制されるのだ。それだけではなく、アメリカの占領下におかれた沖縄人が、様々な意味で自由を制限されていたのは明らかなのだ。⁴¹

しかし、作中でこのように自由を奪われた沖縄人は「日本復帰」を強く望んだと描かれている。例えば、戦後、沖縄には本屋の数が急速に増え、たくさんの本が本土から輸入され、「あらゆる種類の書籍が争って読まれるようになった」とされている。これを作者は、「敗北によって突然文化が高まったわけではなく、いまなおアメリカの占領下にあつて、自由を持たない沖縄島民が、すこしでも本土の空気に接したい欲求からである」と説明する。

知念吉男と新垣清二は、のちに詳述するように、本土と沖縄の関係、米軍や

本土への期待などの点において、沖縄人の対照的な典型として登場する。記者である知念吉男は沖縄がもう日本ではない、「日の丸はよその国の旗だ」といいながら、自分の書斎には「小さい日章旗がいつも壁に貼り付けて」あるような人物である。一方、戦時下、知念吉男とともに「健児隊」の一員だった新垣清二は、戦後、祖国復帰促進期成会に参加し、「沖縄が一日も早くアメリカの手を離れて、日本に復帰することを心から望んでいた」のである。

この二人のみならず、ほかの沖縄人の日の丸の旗に対する思いもそれを裏付けているといえる。

（前略）また戦後、古いものすべてが捨てられたため、那覇では昔のように古雅な新春風景を見ることが出来ない。しかし、正月が来ると、沖縄人たちの希望してやまぬことが一つあった。日の丸の旗を学校や役所にかかげたいことである。しかし、それは許されなかった。

このことを火野は随筆「国旗」で「沖縄では、日の丸の旗を出すことを禁じられている。沖縄は、今なお日本であつて、九州の沖縄県であると、私たちは信じているけれども、アメリカは沖縄を日本本土から引きちぎって、『琉球国』という奇妙な国を作りあげ、自由を奪った軍政を布いている。日の丸を出してよいのは正月元日だけ、それも個人の家だけで、学校や官庁など、人の多く集まるところには立てさせないため、子供達は日章旗を知らないのである。個人で持っているものは少ない。占領軍は沖縄の日本復帰運動をする者をすべて共産党とにらみ、日の丸の旗を赤旗同様にみなしている。沖縄で見られるのは星条旗ばかりだ」と書いている。⁴² 火野にしてみれば、沖縄人は日の丸の旗に対して深い愛情を持っているのと同時に、日本人としてのアイデンティティーも持っているのである。

つまり、米軍の土地接收によって、一部の沖縄人は生存できないほどの貧困に晒された。また、人々は日の丸の旗をかかげるほどの自由さえも失った。しかし、このような生活を強いられている沖縄人は、日本本土に強い帰属意識を持ち、「日本復帰」を望んでいたのである。

では、占領下におかれた沖縄の「日本復帰」について、火野は作品で具体的にどのように表現したのか。

5. 沖縄の「日本復帰」について

5. 1 ちぎられた縄としての沖縄

火野葦平の沖縄と日本本土の関係に関わる見方を明らかにする前に、知念吉男の兄、知念秀行が戦時下につづた「縄の詩」に注目したい。

思鶴よ、

わが縄よ、

わがいのちよ、

世帯じみた手ざわりの、

その美しい結び目よ、

縄は愛であり

平和の絆だ。

砲煙弾雨とは無関係の、

鬼や悪魔とも縁のない

永遠のつながりの象徴だ。

盲目をみちびくもの

暗黒の灯を点ずるもの

このいのち

この縄をたち切ろうとする者は誰だ。

この神聖の縄を

だれも切ることとは出来ぬ。

思鶴よ、

わが美しい縄よ、

いのちの縄よ。

知念秀行にとっては、「縄」こそが命のような存在であり、この「縄」のため、鳥目になっても何とか生き延び、戦ったのである。しかし、この命を支えている〈縄〉は、アメリカ兵の銃弾によって、切れてしまった。知念秀行も崖から落ちて死ぬ。

作品における「縄」は秀行個人にとって大切な意義を持っているのだが、沖縄と日本本土との関係においては、何を意味しているのか。

作中で、この〈縄〉が沖縄を意味しているのは疑えない。戦前、日本の県であり、日本本土と繋がりがあつた、「日本花彩列島の南端に鑲められた詩と情緒の国、夢の島、珊瑚礁と蛇皮線と紅型の陶酔地、南国の情熱を胸に秘めた乙女の恋の桃源郷」⁴³として宣伝された沖縄は、美しく、「砲煙弾雨とは無関係の、鬼や悪魔とも縁のない」、愛に満ちた平和な島であつた。しかし、戦時下「太平洋戦争の末期、日本の敗北を決定的にしたのは沖縄の失陥であつた」と書かれるように、「要衝」として、米軍にとっては、「琉球諸島は、日本四島への入口、その中でも沖縄島は最も重要な島である。琉球進攻を決定したことは、米国が日本の防衛戦の内陣に食込む用意ができていたことを意味するものであつた。」「一方、日本軍にとって沖縄の陥落は、直ちに本土進攻にたいして早急に防衛体制をととのえるか、さもなければ降伏かを意味するものであつた。」⁴⁴そのため、沖縄が「平和の絆」となり、本土防衛のため、戦争に巻き込まれ、犠牲にされた。

また、戦後、沖縄は本土と同じようには、平和憲法の下に民主的な社会を迎えられなかった。3章で述べたように、戦後の沖縄は日本の県として、本土と一つの「縄」で結ばれたと見えるが、実際には「日本からちぎりとられた沖の縄」として、日本本土の利益のために「人質の島」となり、アメリカの植民地となった。新崎が指摘したように、戦後日本を支える平和憲法の基礎には、沖縄の分離が前提として存在した。⁴⁵戦後沖縄のジレンマがそこにある。

ここにいたって、「この縄をたち切ろうとする者は誰だ。」という問いを問わなければならないだろう。知念秀行の「縄」が確かに米軍に切られたが、「だれも切ることはでき」ない沖縄と本土との「縄」が本土にこそ切られたのである。

5. 2 日本への帰属意識を持つている沖縄人

沖縄の「日本復帰」に関して、新垣清二と知念吉男が注目に値する。作中で、アメリカの占領下におかれた沖縄人として、二人が多くの方で正反対といえるほどの認識を持つていると描かれている。

まず、アメリカに対する態度の違いである。新垣は「プライス勧告」の内容が公表される以前は、アメリカにある程度の幻想を抱いていたといえる。沖縄の土地取り上げ問題に対して、「そういえば、今、プライス調査団が来て、軍用地接收問題について、島内を視察して廻ってるじゃないか、あれはやはり抵抗の勝利だよ。(中略) 今度の調査団派遣になったんだ。話せばわかるよ。実情を眼のあたりにみたら、そんなに無茶が出来るはずがない」と考え、また、プライス調査団に対しても、「きつと、今度の調査で、打開の道が開けると思う」とポジティブに捉えていた。そこから、新垣はアメリカ政府の主導によるプライス調査団を通じて、沖縄と沖縄人の現状を変えることに希望を寄せていたことがわかる。

これに対して知念は「アメリカは、沖縄を盗んだ大泥棒、(中略) アメ公は口

では民主主義を唱えているが、本性は強盗だ、そして戦争狂だ。どんどん土地を取り上げて軍事基地にし、島民を飢餓に追いやる」とアメリカを批判する。また、プライス調査団に対しても、「調査団の結論はきまっとる。現地に来てみたら、いっそう沖縄の戦略的 중요さがわかった。一切は戦略優先だ」という否定的な見方を示す。知念から見れば、プライス調査団の訪沖によって、沖縄の米軍の基地問題を解決することや、アメリカの沖縄に対する植民地支配の現実を変えるのは不可能である。また、彼にとっては、プライス調査団の訪沖の目的は、アメリカにとっての沖縄の戦略的地位を強調し、沖縄に対する排他的支配を強化する決意を固めることに他ならなかった。

次に、沖縄の所属に関する認識の違いである。戦時下、「健児隊」の一員であった新垣にとっては、沖縄が日本に属することに疑う余地はない。だからこそ、戦後、祖国復帰促進期成会の一員となり、復帰運動に身を投じた。それに対して、知念は、すでに触れたように、自分の書齋に日章旗を掲げているが、沖縄の所属については、「沖縄は日本じゃない」、「日本からちぎりとられた沖の縄」で、「沖縄は外国なんだ」と考えている。彼は常に、沖縄はアメリカの「植民地」と強調する。

さらに、日本本土及び本土人に対する考え方の相違である。「東京の政府も、本土の人たちも、沖縄を忘れるわけではないよ。」というように、新垣にしてみれば、本土と本土人は沖縄を見捨てないはずであった。そしてそこには、本土と本土人によって、沖縄が救われるという期待が含まれていたはずである。一方、知念吉男は「東京の日本政府は、南の果ての海のかなたの沖縄のことなんて、里子にやった継子くらいにしか考えとらんのかじゃないか」と日本本土を批判する。知念にとっては、本土と本土人によって、沖縄の現状を改善されることはありえない。

最後に、沖縄の「日本復帰」への見方の違いである。前述のように、新垣は

本土に強い帰属意識を抱き、何の迷いもなく復帰運動に参加している。それに對して、自分が「日本人全体のだれにも劣るまい」という愛国者だと強調し、書齋に日章旗をかける知念は、日本人としてのアイデンティティを持っているながら、沖縄の「日本復帰」に対しては否定的な考えを持っている。それは、新垣が住民大会に参加し、講演を行うのを無駄なことだと認識していることからも知ることができる。また、「どうも、東京の政府は、沖縄や、日本国民の幸福を考えるよりも、アメリカの鼻息をうかがうことの方が忙しいらしいからな。はつきりいうと、アメリカの家来だからな」というように、日本政府が本土人と沖縄人の利益を比べたうえで、アメリカの方を重視するということを知念は知っている。これも知念が、沖縄がアメリカの植民地だと思う原因であるといつてもさしつかえないだろう。つまり、彼にとってはアメリカが沖縄を返還しない限り、日本政府は沖縄を本格的に日本に復帰させることはできないということである。

以上の内容からみれば、新垣清二と知念吉男は対照的である。新垣清二は、沖縄を日本だと思ひ、日本に復帰することを望んでいる。最初はアメリカ政府によって、沖縄の現状が改善されることに希望を寄せていたが、「ブライス勸告」の公表によってこの期待が打ち砕かれ、最後に、日本復帰運動に参加する決意を固めるのである。それに対して、知念吉男は日本人としてのアイデンティティを抱えているものの、沖縄が本土に見捨てられ、「日本復帰」はできないと考え、アメリカに対しては、批判の態度を持つのである。

しかし、この二人に対する対照的な描写に注目すると同時に、見落としてはいけないのはこの二人には日本本土に強い帰属意識を持つという共通点があるということである。

なぜ火野は対照的でありながら、共通点を持つている二人の人物を作り上げたのか。

前述のように、知念吉男はデカダンスに近い諦念を持っている。Stefano Rimando⁴⁶が指摘したように、知念吉男は火野の沖縄人の友人をモデルにして作った人物である。火野は「沖縄はフタカチャの御代」で、自分の三度目の訪沖に言及する時、「しかし、一週間の滞在中、もつとも私の心を痛めたのは彼等の頽廢化だった。言論の自由がなく、一切はアメリカの占領政策によって抑圧されている下では、魂も腐るのか。嘗ては潑刺としていた友人たちがみんな骨抜きにされているように見えた。日本復帰を唱える者は共産党と睨まれ、日の丸の旗は赤旗同様に考えられている」と述べている。⁴⁷火野は知念吉男を借りて、一部分の沖縄人の状態を表現したといえよう。

火野は「サンフランシスコ条約の解釈はいろいろであるが、沖縄が日本であり、九州の沖縄県であることは否定できないのである。（中略）沖縄では、日本本土のことをヤマトと呼んでいる。日本復帰運動はヤマト復帰であり、ヤマトは沖縄人のあこがれの的だ」⁴⁸と強調している。また、すでに触れたように、火野は「沖縄は、今なお日本であつて、九州の沖縄県である」と信じている。言い換えれば、火野にしてみれば、沖縄は日本に復帰すべきだといえる。このような考えに基づき、また、当時の沖縄の日本復帰運動の現状と合わせ、火野は作品で、本土に強い帰属意識を持っているという共通点がある沖縄人イメージをつくりあげたと推測してもさしつかえないだろう。

つまり、火野は沖縄人の友人の頽廢的な状態を表現すると同時に、自分の沖縄が日本の一部分として、日本に復帰すべきだという主張を強調したのである。では、火野の沖縄の「日本復帰」の認識はどのような特徴があるのか。

5. 3 火野の「日本復帰」認識の特徴

沖縄の「日本復帰」問題を論じるとき、考えなければならないのは（当事者は誰であるか）という問題だろう。沖縄問題においては、アメリカと日本本土

が間違いない当事者であるが、それと同時に、本土人と天皇も当事者の範囲から外すことはできないだろう。

沖縄の「日本復帰」の訴えの聞き手には、アメリカだけではなく、本土人も含まれている。なぜなら、戦時下、沖縄が本土防衛のため、大きな犠牲を払ったからである。また、戦後、日本の独立を回復させた対日平和条約を成立させた柱の一つは、米軍の沖縄への排他的支配という対日平和条約の第三条である。⁴⁹しかし、残念ながら、沖縄の「日本復帰」問題を考える本土人のイメージが小説「ちぎられた縄」には存在しない。すなわち、本土出身の火野の沖縄「日本復帰」への認識において、自身を含め、当事者であるはずの本土人は「不在」である。火野は本土人の立場から、ひたすらに沖縄人が日本への復帰を願うことを強調したにも拘らず、もつともその訴えに応えるべき本土人に関しては、言及していない。

また、周知のとおり、戦後、新しい日本国憲法の発効により「天皇は日本国および日本国民統合の象徴」となり、国政に関する権能を有しなくなるのである。しかし、3章で言及したように、一九四七年九月、天皇は側近の寺崎英成を通して、沖縄に関する天皇メッセージをGHQに伝えた。また、注意しなければならぬのは、「寺崎から天皇の考えを伝えられたGHQの政治顧問シーボルトは、このことを米國務省に伝達した報告文の中で、このメッセージは、疑いもなく天皇の私的利益に基づくものであると指摘している」ということである。⁵⁰「天皇の私的利益」の具体的な内容はともかく、この天皇メッセージの存在は、天皇がある程度で沖縄の戦後と「日本復帰」問題に影響を与えたといえるだろう。しかし、沖縄問題の当事者の一人であり、かつ非常に重要な存在である天皇は、「ちぎられた縄」には「不在」である。天皇は、本土を守るため、戦争によってジレンマに陥った沖縄の「日本復帰」問題において、どのような役割を演じるのか。また、沖縄の現状を変えるために、日本国と日本国民の象徴

である天皇が何をするべきなのか。沖縄の「日本復帰」の成否に関わるこれらの問題は、当事者である天皇の「不在」のため、考える範囲から外されたのではないだろうか。

小説のタイトルが示すように、火野は沖縄が日本から「ちぎられた縄」だと考えていた。ここで看過すべきでないのは、火野が「ちぎる」の受身形「ちぎられた」を使ったことである。では、この「ちぎる」という動作の主体は誰であるのか。小説を普通に読めば、その主体がアメリカであるのは自明であろう。しかし、沖縄に関する天皇メッセージに強調されていたように、沖縄をアメリカの占領下に置いたのはアメリカの利益のためだけではなく、日本の利益にも合致するものだったことを忘れてはなるまい。だとすれば、日本本土、日本人と天皇もこの「ちぎる」という動作の主体だといっても構わないだろう。つまり、「ちぎられた」という受身形によって、日本本土、本土人と天皇が共犯者だという事実が隠されている。小説で火野は知念吉男を借りて、日本政府を批判したにも拘らず、戦後、日本本土と本土人の沖縄への加害を反省する観点は乏しかったといわざるを得ない。池田浩士が『火野葦平論』で火野がアメリカをひたすらに批判しているにも拘らず、日本からの沖縄への加害を無視したと批判した理由はそこにあるだろう。そして注目したいのは、天皇を「不在」にさせるとともに、天皇への批判が作中にはないということである。それは、戦後、天皇を客観的に認識しえたか否かに関わることではないだろうか。

つまり、沖縄の「日本復帰」問題における当事者は、アメリカ以外に、「沖縄—日本政府—天皇—本土人」であるはずである。しかし、小説「ちぎられた縄」では、火野は本土人と天皇を「不在」にさせた。そうだとすれば、火野は戦時下、沖縄人が守った天皇、および彼自身も含める本土人を沖縄の「日本復帰」問題から排除した。前述のように火野が「地獄島沖縄」において沖縄問題を日本と日本人全体の問題にすべきだと強調したにも拘らず、作品からその認識が読み

取れない。

小説において、当時の沖縄人全体が日本人としてのアイデンティティを持ち、日本に対して強い帰属意識を持っているのだ。沖縄の帰属をめぐる、他の政治的主張を持っている沖縄人は作品には登場していない。言い換えれば、火野の小説では、沖縄人全体が「日本復帰」に賛成する。これは、前に触れた火野の「日本復帰運動はヤマト復帰であり、ヤマトは沖縄人のあこがれの的だ」という主張の裏付だといえる。しかし、2章で挙げたように、沖縄の帰属をめぐることは、そもそも三つの主張がある。当時、琉球政府行政主席を務め、親米を主張した比嘉秀平⁵¹などの認識はどうであるのか。作中には全く触れられていない。つまり、火野は当時の沖縄の現状を伝えるというより、沖縄現状の一面——復帰運動——を借りて、自分の「沖縄が日本に復帰すべき」という政治的主張を伝えたといったほうが適切である。本土作家火野の沖縄問題の複雑さへの認識不足もそこからわかる。

作品で描かれた占領された沖縄の惨めさと軍事基地に苦しめられる沖縄人の厳しい状況は確かに事実であるが、沖縄全体が日本に復帰したいという沖縄イメージは火野に想像されたものだといえよう。Stefano Ronagnoi⁵²は火野の一九五二年に発表された「舞姫」を論じた際、火野の三度目の訪沖より二年前に創作された「舞姫」は火野によって想像されたものと指摘している⁵²。それと同じように、三度目の訪沖から二年後に書き上げた「ちぎられた縄」における沖縄も火野の「観念的な産物」だという可能性がないとはいえない。火野は沖縄・沖縄人を描く時、本土作家の立場から想像した、もう一つの「沖縄」・「沖縄人」を創造している。しかし、その創造されたのはただ日本人としてのアイデンティティを持ち、日本に復帰したい沖縄人だけである。そこで、火野の認識に欠けていたのは沖縄人が日本人としてのアイデンティティを持つこと自体が、「沖縄の日本化」および「皇民化」施策の結果の一つだということである。一八

七二年、明治政府は琉球王国を併合した。一八七九年、琉球王国の所屬状態を継続するという主張を無視し、琉球の日本の国防上の価値を強調し、琉球処分によって琉球王国を一県として日本に組み込んでいた。琉球処分以降、沖縄を国防拠点として確保するため、日本による国民教育が行われた。その国民教育の目的はまさに沖縄人を「日本人」に改造し、日本及び天皇への忠誠心を育成するところにあった⁵³。

大田昌秀は『沖縄のこころ——沖縄戦と私——』で、「沖縄の心」について、「いずれも一言で表現しうるほど単純明快なものでないことは、いうまでもないが、わたしは、折りにふれ「沖縄の心」は、「反戦平和」「人権回復」「自治確立」という考え方が柱になっていることを、くりかえし指摘してきた。これは、たんなる思い付きではない。戦前戦後の資料を整理・分析し、大衆運動の歩みを丹念に跡づけたうえでの結論である⁵⁴」と述べている。これを考え合わせると、火野は自身が沖縄に関心を持ち、愛すると強調したにも拘らず、到底沖縄人の立場から沖縄問題を考えられなかった。ただ沖縄を舞台にし、自分の政治認識を表明したに過ぎない。戦後、占領された沖縄の主題の一つである「土地闘争」に内包されている「日本復帰」問題は、小説「ちぎられた縄」では戦後沖縄の最も大切な問題とされ、「日本へ復帰する」ということが沖縄人の唯一の出口にされたのである。逆に、主題であるはずの「土地闘争」が「日本復帰」に取って替われ、矮小化された。つまり、火野にとっては、日本へ復帰すれば、沖縄の全ての問題が解決できる。そこから本土作家火野の戦後沖縄問題への認識の甘さが見えるだろう。

また、火野の「日本復帰運動はヤマト復帰であり、ヤマトは沖縄人のあこがれの的だ」という「日本復帰」認識には、沖縄に対する本土人の傲慢さが端的にあらわれている。

沖縄出身の文学者大城立裕、池田和などに批判されたように、ほぼ同じ時期

に発表された戯曲「ちぎられた縄」には当事者性が乏しく、それは沖縄の「島ぐるみ闘争」を材料にして創作されたが、作品の内容が当時の沖縄の実際と異なり、「作者自体が、沖縄をよく知らない。そして、マスコミを通して、沖縄を観念的にとらえている」⁵⁵。また、彼らにとっては、火野の作品に描かれた沖縄はいつまでも外来者、旅人の眼で見た沖縄であり、「全体的に感傷がつよすぎる」ともしている。そして、作品から読み取れるのは共感ではなく、「外部からの同情、つまり傍観者の同情」⁵⁷だというものである。火野が書いた「そのいくつかの映像のうち、私の網膜からどうしても消えないのは、ゴルフ場のあるうつくしいアメリカ兵住宅地と、それにすぐ隣接している沖縄人のむざんな掘立小屋との対照である」という内容もある程度でそれを裏づけた。そうすれば、先行研究に挙げた仁衡の、火野が当事者性があるという評価に対しては、疑問を禁じ得ない。

要するに、火野の「日本復帰」認識において、本土人と天皇は「不在」である。また、火野は「ちぎられた」という受身形によって、本土人と天皇の責任問題を巧みに避けた。そして、一見沖縄人の立場から沖縄人の「日本復帰」の訴えを描いたと見えるけれども、戦後沖縄の本当に解決すべき問題を曖昧化し、想像した沖縄像を通して沖縄が日本のものであり、日本に復帰すべきだという政治認識を暴露したのである。沖縄問題を日本と日本人全体の問題にすべきだと主張している本土作家火野の認識には、沖縄問題複雑さへの認識の甘さ、沖縄問題解決に関する考えの浅さと本土人の驕りがある。その原因は火野が本土作家として、「当事者性」が欠けているということにあると思われる。

6. 終わりに

戦前に伝統的な琉球情緒に満ちた沖縄に惹かれ、戦時下、惨めな地上戦に陥った沖縄を目撃した火野は、戦後の沖縄にも関心を示した。本稿では、「ちぎられ

た縄」における火野葦平の沖縄「日本復帰」問題に関する認識を検討してきた。最後に、作品に描かれた以後の、現実の沖縄がたどった歴史を瞥見しておく。

周知のとおり、一九七二年、沖縄は制度上の本土復帰を果たした。しかしながら、沖縄と沖縄人は終始占領された状態から解放されなかった。相変わらず米軍軍事基地問題に苦しんでいた。新崎は「佐藤首相が衆議院を解散し（二月二日）、総選挙を行うと自民党は三〇〇近い議席を得て圧勝した（二月二七日）。日米の軍事協力強化政策の中心環に沖縄返還を位置づけ利用するという政策が成功したといえるかもしれない」と指摘したように、沖縄の復帰は日米それぞれ利益をもとにした戦略的選択だといつて構わないだろう。だとすれば、返還されたにも拘らず、国土面積の〇・六%を占めるに過ぎない沖縄に、在日米軍基地（専用施設）の約七〇・三%が集中する状況が生み出されたのも理解しやすい。言い換えれば、沖縄はアメリカの軍事基地問題から今に至るまで抜け出すことができないでいるのである。普天間基地の辺野古への移転の問題は端的にそれを表している。

二〇二二年、沖縄の「日本復帰」五〇周年という大きな節目を迎えた。この五〇年の「日本復帰」は沖縄に何をもたらしたのか。その答えが沖縄の現状にあるであろう。五〇年の間に、「沖縄の心」がどれほど「外」に読み解かれていたのか。あるいは、読み解かれたことがあるのか。「日本復帰」は本当に沖縄人の望みなのか。あるいは、沖縄人の望みは何であるか。これから、それらの問題を考えぬなくてはならないだろう。

本稿では、小説「ちぎられた縄」から、火野の沖縄題材作品における沖縄の「日本復帰」に関する内容を検討した。火野の他の沖縄題材作品において、何を表したのか。また、火野は小説「ちぎられた縄」で沖縄の基地経済問題に言及したが、これについて、彼はどのように認識するのか。そして、戦後の沖縄に対して、火野は他にどのような見方をしているのか。さらに、火野の他の沖縄題

材作品に描かれる本土人のイメージはどのようなものであるのか。そのイメージの特徴によって、火野はどのような考えを伝えようとしたのか。今後、火野の沖縄題材作品を全面的に検討し、以上の問題を明らかにする必要がある。

【付記】

1、小説「ちぎられた縄」の本文引用は、『新日本文学全集19・火野葦平集』（筑摩書房、一九五九年四月）に拠った。（内容は初出雑誌『オール小説』のと同じである。）引用するに際して、ルビは省略した。

2、小説「ちぎられた縄」で「一九五四年十二月、僚島である奄美大島が日本へ帰属した。」と書いているが、「奄美群島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定及び関係文書・御署名原本・昭和二十八年・条約第三三三号」によると、奄美大島が「一九五三年十二月」に日本に返還されたのである。

注

1 一度目は一九四〇年五月、友人たちと旅行に沖縄へ行った。二度目は、ビルマのインパール作戦に報道班員として参加し、帰国途中で、沖縄で数日を過ごした。三度目は、一九五四年二月、沖縄への戦後初めての航空路が開設される機会に、火野葦平は日本航空と現地の招待によって、最後に沖縄へ一週間の旅行をした。

2 火野葦平「地獄島沖縄」（『脈』第95号、脈発行所、二〇一七年十一月）、四頁。
3 坂口博「火野葦平と沖縄」（『脈』第95号、脈発行所、二〇一七年十一月）、十七頁。

4 火野葦平「沖縄はフタカチャの御代」（『世界』第142号、岩波書店、一九五七年十二月）、一四六頁。

5 玉井史太郎「ちぎられた縄」（『脈』第95号、脈発行所、二〇一七年十一月）、九頁。

6 戯曲「ちぎられた縄」の登場人物と構成が小説のものと違う。

7 池田浩士『火野葦平論』（インパクト出版会、二〇〇〇年）、一一二頁。

8 菅野聡美「楽園幻想の起源を求めて——①火野葦平が愛した琉球」（『政策科学・国際関係論集』（7）、琉球大学法文学部、二〇〇五年三月）、二八五頁。

9 仁衡琢磨「本土」人が描いた沖縄と基地問題——火野葦平と当事者性」（『脈』第95号、脈発行所、二〇一七年十一月）、六一頁～六七頁。

10 Stefano Romagnoli 「From Secluded Paradise to Hell an Earth. Hino Ashihei's Imaginative Geography of Okinawa」（『Annali di Ca' Foscari. Serie orientale』（55）Ca' Foscari University of Venice、二〇一九年）、五五五頁～五七八頁）
11 本土人：本論文では、沖縄県以外の日本の各地出身の日本人を指す。

12 注2に同じ。
13 火野葦平「ちぎられた沖縄」（『河童会議』、文藝春秋社、一九四八年四月）、三九頁。

14 九十日にわたり繰りひろげられた死闘の結果、戦死者は、日本兵六万五千〇八人、沖縄県出身者（軍人軍属）二万八千二百八十八人、その他の戦闘参加者五万五千二百六十八人、一般人九万四千七百四十四人で、計二十四万四千三百六十八人である。（米国防務省編・外間正四郎訳、『日米最後の戦闘』、一九六八年一月、二頁。）

15 当時の詳しい状況について、大田昌秀は「沖縄守備軍さいごの拠点、摩文仁が丘が敵の手中に帰したのは、六月二三日であった。その日、守備軍首脳（沖縄守備軍司令官牛島満中将、筆者注）は、自刃し、嘉手納飛行場近くの米第一〇軍司令部では、音楽隊がアメリカの国歌を吹奏する中で、星条旗がかげられ、沖縄本島が占拠されたことが全世界に報じられた」と書いている。（大田昌秀『沖縄のころ——沖縄戦と私——』、岩波書店、一九七二年八月、二〇六頁。）

16 新崎盛暉『日本にとって沖縄とは何か』（岩波書店、二〇一六年一月）、八頁。

17 新崎盛暉『現代日本と沖縄』（山川出版社、二〇〇一年）、三〇頁。

18 注16、十一頁。
19 対日平和条約 第三条：日本国は、北緯二十九度以南の南西諸島（琉球諸島及び大東諸島を含む。）孀婦岩の南の南方諸島（小笠原群島、西之島及び火山列島を含む。）並びに沖の島及び南島を合衆国の唯一の施政権者とする信託統治制度の下におくこととする国際連合に対する合衆国のいかなる提案にも同意する。このような提案が行われ且つ可決されるまで、合衆国は、領水を含むこれらの諸島の領域及び住民に対して、行政、立法及び司法上の権力の全部及び一部を行使する権利を有するものとする。（<https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/tha-day/4561>、二〇二二年七月九日参照した。）

20 注16、十八頁。
21 ベトナム戦争：南ベトナムの内戦にアメリカが全面に介入し、南ベトナム民族解放戦線とこれを支援する北ベトナムと戦った戦争。事実上アメリカは敗退し、一九七五年四月、ベトナムは統一された。（注17、六〇頁。）

22 注17、四六頁。
23 琉球列島米国民政府について：一九四五年四月一日の沖縄本島上陸により始まった沖縄戦では、米軍は軍政施行を宣言（ニミッツ布告）し、本島上陸後、軍政府を設立した。軍政府は、戦闘期間中、避難民の収容、食料配布、収容所の管理・運営などを行った。一九五〇年二月一日、軍政府が廃止され、替わって民政府が設立された。軍政から民政への移行は、沖縄住民の協力を得て、沖縄の長期的統治を可能にするための処置といわれる。（<http://www.rekishi-archiv-city.naha.okinawa.jp/archives/site/>、民政府跡二〇二二年二月九日参照した。）権

限は絶大で行政主席や副主席、上訴裁判所判事の任命権、立法院が制定した法令等の拒否権、裁判権を米国政府裁判所の管轄に移管する権限までも握っていた。軍政府と何ら変わらなかった。(https://ryukyushippo.jp/okinawa-dic/prentny-42881.html 二〇二二年二月九日参照した。)

24 注22に同じ。

25 注22に同じ。

26 一括払い…米軍が定めた借地料(地価の六%)の一六・六カ年分、つまり地価相当額を一度に支払うことにより、限定土地保有権(一種の永代借地権)を設定しようという、実質的土地買い上げ政策であった。(注17、四八頁。)

27 土地を守る四原則…一九五四年四月三〇日に立法院が全会一致で決議した「軍用地処理に関する請願決議」の中で米政府に要請した四つの原則。(一)米軍用地地料一括支払い反対、(二)土地の適正補償、(三)米軍が加えた損害の適正賠償の支払い、(四)新たな土地の収用反対。(https://ryukyushippo.jp/okinawa-dic/prentny-42305.html 二〇二一年十月九日参照した。)

28 四者協…四者協議会。立法院、行政府、市町村長会、土地連合会(軍用地主の組織)の四団体である。(注16、一二頁。)

29 注26に同じ。

30 小熊英二『日本人の境界』(新曜社、一九九八年十一月)、四八三頁。

31 林泉忠「沖縄アイデンティティの十字路」『政策科学・国際関係論集』第七号、琉球大学法文学部、二〇〇五年三月、二七〇頁。

32 櫻澤誠「戦後沖縄における「68年体制」の成立―復帰運動における沖縄教職員会の動向を中心に」『立命館大学人文科学研究所紀要』(82)、立命館大学人文科学研究所、二〇〇三年十二月、一六五頁。

33 注31に同じ。

34 注17、五〇頁。

35 ガーブルー川…那覇市の中央を流れる延長約三六三〇メートルの小流。用途は排水路。改修工事が完成する一九六五年(昭和四〇年)三月までは、台風や豪雨のたびに周辺の低地帯(沖縄付近・牧志公設市場^{まきしこうせいちやう}・神里原^{かみさとばら}一帯)が浸水に悩まされた。『沖縄大百科事典(上巻)』、沖縄タイムス社、一九八三年五月、六四二頁参照。)

36 注4、一四七頁。

37 由美子ちゃん事件…一九五五年(昭和三〇)九月三日、石川市に住む永山由美子ちゃん(六歳)が米軍に暴行・殺害され、嘉手納海岸死体となって発見された事件。加害者は嘉手納基地第二十二高射砲大隊所属のH軍曹(三十一歳)。米軍による軍用地接収をめぐる島ぐるみ闘争が高まっていたところでもあり、激しい抗議活動が展開された。米軍人・軍属の犯罪が大きくとりあげられ、米軍当局に抗

議の矛先が向けられた最初の事件ともいえる。(『沖縄大百科事典(下巻)』、沖縄タイムス社、一九八三年五月日、七八四頁参照。)

38 これについて、火野葦平は随筆「ちぎられた沖縄」に「最近の統計を持たないが、昨年、『ちぎられた縄』を書くとき、集めた資料のなかに、過去五年間における、外国人による犯罪の統計表があった。『殺人三、未遂三、暴行致死一、暴行二百九、未遂十七、放火十一、住宅侵入七十八、器物損棄三百九十五、交通事故被害、死亡百二十四、重傷百八十五、軽傷三百九十三、その他』と書いている。(注13に同じ)数字から見れば、小説のこの部分の内容が当時の沖縄の現状をそのままに反映したといえよう。

39 当時の現状について、国場幸太郎は「これとは別に、沖縄人がアメリカ軍の布告、布令、指令に違反した事件は、すべて、米国民政府裁判所であつかわれていました。(中略)この米政府裁判所の裁判官と検事は、みんな、アメリカの軍人で、別に資格のある法律の専門家ではありません。そして、裁判のやり方は、その場で即座に判決をくだす即決の軍事裁判でした。一方、アメリカ兵が沖縄人を殺したり、傷つけたりする犯罪は、この米国民政府裁判所とはまったく別の軍事法廷(軍法会議)で裁かれていました。この軍事法廷は被害者の家族さえも傍聴をゆるさない完全な秘密裁判で、判決の結果も公表しませんでした。その上、被害者に対する補償も何一つありませんでした。だから、たとえば、アメリカ兵に乱暴されて沖縄人が殺されても、犯人がどういう刑をうけたかもわからず、死んだ人はまったくの殺され損です。その家族が、ただただ泣き寝入りさせられる状態は、敗戦直後の頃と少しもかわりありません。」と紹介している。(国場幸太郎『沖縄の歩み』二〇一九年六月、二二六頁―二二七頁。)

40 伊江島は沖縄北部の本部半島からちぎられたように、海中から突き出ている。米軍の最初の琉球攻略作戦の第二期作戦の計画として、伊江島を確保することによって、沖縄北部を制御し、日本本土を攻撃することを実現しようとする。(注14、四頁―七頁)戦況の変化につれ、伊江島占領は第一期作戦に置かれたのである。「この作戦のおもなねらいは、沖縄攻撃を支援する一方、日本本土を攻撃にも備えて、そこにある飛行場を奪取することにあつた。」(注14、六一頁)伊江島の戦闘は沖縄戦の典型的な事例とされ、「沖縄戦の縮図」といわれている。一九四四年十月十日(十・十空襲)未明から沖縄本島を襲う米軍の一隊が伊江島を狙い、初めに伊江島飛行場を爆撃した。通信網・交通網は遮断され四〇余名の死者を出した。これが初めての犠牲者である。一九四五年四月一六日午前八時、米軍の上陸部隊第七七歩兵師団が上陸用舟艇・水陸両用戦車を用いて伊江島の西崎海岸から上陸し、その後南海岸中央部海岸から続々と米軍部隊が上陸した。日本軍は伊江島全域で約一週間に及ぶ白兵戦・肉弾戦法に頼り戦力を補っていた。城山南方の学校陣地(現・伊江中学校)付近は米兵たちが「血ぬられた丘」と名付けたほ

どの激戦が繰り返された。激闘の末、四月二一日午後五時三〇分に米軍から伊江島確保が宣言された。(https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkahou/sensai/situation/state/okinawa_36.html 二〇二二年七月一九日参照した。) 懊愴をきわめた伊江島の六日間の戦闘で米軍は四千七百六名の日本軍を殺し、百四十九名を捕虜にした。戦死した多くは民間人だった。(中略) 軍服を着せられ、日本軍の兵器をもった民間人はおおよそ千五百と推定された。(注14、七八頁)

41 当時の沖縄の不自由な社会状況について、人民党の国場幸太郎は伊佐浜の武力接収(一九五五年七月)からまもない時期に、自分がGIC(占領地の住民のあいだで秘密にスパイ活動をするアメリカ陸軍の「対民間諜報部隊」のことである。(注39、二四二頁))に拉致され、拷問された経験を詳しく述べることによって、紹介する。(注39、二四二頁～二五九頁)

42 火野葦平「国旗」『河童会議』、文藝春秋社、一九四八年四月、一三頁。

43 火野葦平「歌姫」『石川達三・火野葦平集』、筑摩書房、一九七二年一月、三二頁。

44 注14、一頁。

45 新崎盛暉「沖縄返還運動に内在する問題点」『沖縄本土復帰の幻想』、三一書房、一九六八年十一月、一〇八頁。

46 注10、五七二頁。

47 注4、一四八頁。

48 注47に同じ。

49 これについて、新崎盛暉「一九五二年に平和条約の成立があり、そして、第三条によって沖縄は現在のような地位に置かれるわけです。GHQの覚書が占領政策の確定であったとすれば、第三条の成立は国際法上の沖縄の地位の決定ということになるのです。いうまでもなく、この場合にも、平和条約を成立させたのは、東西対立とか朝鮮戦争の結果、アメリカが日本をいわゆる自由主義陣営のなかに結びつけるということだったと思いますが、そのための一つの柱として第三条があったと見えるべきだ」と指摘する。(注45、一〇九頁)

50 注16、九頁。

51 比嘉秀平「親米派琉球民主党の初代総裁。琉球民主党綱領の第一条は「米国の善意と世界平和政策に信頼し、自治権を拡大して住民の繁栄を確保する」という内容である」。(https://www3.archives.pref.okinawa.jp/RDA/ryusei/R00000470B/index.html?title=琉球民主党に関する綴%201953年04月&page=36 二〇二二年十月二十一日参照した。)

52 原文は「It is noteworthy that this description (「舞姫」における「那覇」についての内容——筆者注) cannot possibly have been based on any actual experience of the place since it was written two years before Hino's postwar

visit to Okinawa. It (「舞姫」——筆者注) is therefore a product of Hino's imagination and, presumably, second-hand accounts.」である。(注10、五六七頁)

53 注30、八頁～四九頁。

54 注15、六頁。

55 大城立裕・池田和・池澤聰・新川明・眞栄城啓介「主題としての「沖縄」——火野葦平「ちぎられた縄」・佐藤直孝「沖縄——梯梧の花の咲く日まで」・霜多正次「沖縄島」をめぐる」『沖縄文学』第一巻第二号、琉球大学文芸部、一九五七年一月一九日) 四六頁。

56 注55に同じ。

57 注55、四八頁。

58 佐藤首相「日本の第六一・六二・六三代内閣総理大臣佐藤栄作を指す。

59 注16、六八頁。

60 https://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/kichitai/documents/kitino_jyoutyou.pdf(二〇二二年十二月二十六日参照した。)

参考文献一覧

北野辰一「沖縄 火野葦平と木下順二」『脈』第95号、脈発行所、二〇一七年十一月)

仲程昌徳『小説の中の沖縄』(沖縄タイムス社、二〇〇九年三月)

松下博文『琉球舞姫』論——火野葦平の琉球旅行』『叙説XIII 特集・火野葦平の全貌』、花書院、一九九六年)

松本輝夫「火野葦平と沖縄への前衛的志情——谷川雁との接点にも触れて」(『脈』第95号、脈発行所、二〇一七年十一月)